

(PDF版・2の9) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「二 人間の前での神」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「二 人間の前での神」 (55-114頁)

「二 人間の前での神」

「われわれは、今、神の啓示に基づくわれわれの神認識の<制限された姿>〔すなわち、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている起源的な第一の形態の神の言葉としての「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>、詳しく言えば神のその都度の自由な恵みの神的決断による、客観的な「存在的なく必然性>」——すなわちその「死と復活の出来事」におけるイエス・キリストの「啓示の出来事」とその「啓示の出来事の中の主観的側面」としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」——すなわち主観的な「認識的なく必然性>」を前提条件としたところの（換言すれば、「啓示と信仰の出来事」を前提条件としたところの）、客観的な「存在的なくラチオ性>」——すなわち三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）と主観的な「認識的なくラチオ性>」——すなわち徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性に基いてのみ、終末論的限界の下で与えられるわれわれの神認識、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事の<制限された姿>〕、「したがって、〔「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基いて、聖書を自らの思惟と語りにおける「原理」・「規準」・「法廷」・「審判者」・「支配者」・「標準」として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返す、聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、「純粋な教え」としてのキリストにあつての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを尋ね求める」<教会>教義学の問題、<福音主義的な>教義学の問題）と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（区別を包括した単一性において、その教会教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の問題、すなわちキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、すなわち全世界としての教会自身と世のすべての人々が「純粋な教え」としてのキリストの福音を現実

的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え) という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行く] 信仰という方法によるわれわれの神認識の<制限された姿>」、「積極的に言うこともできる」第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神によって意志され、手配され、<規定された姿>の本質について、なおいくつかのことを原則的に明らかにする……」。

(1) 第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神が、〔「自己自身である神」としての〕三位一体の神として、その自己認識の真理性の中で〔すなわち、「自己自身である神」としての「ご自身の自己認識、自己理解、自己規定の真理の中で、すなわち「神の領域の中での神ご自身の真理」の中で、すなわち神がご自分を「自己自身である神」として、自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の<内>三位一体的特殊性」・「三位相互<内在性>」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」であると自己認識、自己理解、自己規定した内的な真理の中で、すなわち神がご自分を「自己自身である神」として、「三位一体の神」の「根源」・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし、自己啓示する神として自分自身が根源〔・起源〕」であり、それ故に「その区別された子は、父が根源〔・起源〕であり、神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源〔・起源〕である」と自己認識、自己理解、自己規定した内的な真理の中で)、ご自身を〔「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方(外在的本質)、すなわち父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体において、〕われわれに対し認識すべく与え給う時、「神はその被造物のあるものをして、換言すれば神によって造られた世界の空間と時間の中での一つの出来事をして、神に代わつて語らせ給う」のであるが、「そのような神によって、神ご自身について語るよう委任と能力を与えられた被造物の存在根拠と総内容」は、「換言すれば神の啓示の sacramental な実在の存在根拠と総内容」は、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における第二の存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事)、客観的な「存在的な<必然性>」と主観的な「認識的な<必然性>」を前提条件とした主観的な「認識的

なくラチオ性>」を包括した客観的な「存在的なくラチオ性>」としての三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊自身の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉（「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」）、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）にしてまことの人間（神の隠蔽）、その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの<名>」——この「<イエス・キリストの人間性の現実存在>である」。「結合ノ恵ミニヨッテ、換言すればこの被造物が神の永遠の言葉と一つとなることに基づいて、また一つとなることを通して」、「この被造物は、高められ、拔擢された神の業およびしるしとなる〔すなわち、「この被造物は、高めれ、拔擢された」「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」となる〕」。

第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「永遠の言葉そのものが、肉となったということに基づいて〔すなわち、その内在的本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉が肉となったということに基づいて〕、換言すれば神の啓示がイエス・キリストの中で一度ですべてにわたって力を奮う仕方で起こったということに基づいて、われわれは、その同じ神の啓示を、それがその待望と想起の中で証しされているところで、いたるところ認識するのである」。『教会教義学 神の言葉』では、次のように述べられている——「旧約聖書的な待望の時間と新約聖書的な想起の時間との間の實在の成就された時間とは、イエスをご自分をお示しになった復活のあの四〇日（使徒行伝一・三）のことである〔「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」のことである〕」、「新約聖書の証人たちは、このキリスト復活の四〇日をおぼえる想起において、キリストの死とキリストの生涯を想起する時、光を得たのである。彼らは甦えりの証人である。そして彼らは、既に来た方〔死を包括し止揚し克服したところの、復活されたキリスト〕は、またこれから〔終末、「完成」時において〕来たり給う方であることを語るのである」、「新約聖書の信仰は、想起の時間である聖霊降臨日のあとの時代である」、それ故に「その想起の時間、聖霊降臨日以降の時間は、實在の成就された時間、キリスト復活の四〇日の時間ではない」が、「しかし、その想起の時間は、甦えられた方、復活されたイエスをおぼえる想起の時間として、必然的に甦えられた方を待ち望む待望の時間〔終末、救贖、復活されたキリストの再臨、「完成」〕を待望する時間であり、そのようにしてそれは、實在の成就された時間、キリスト復活の四〇日の時間に参与するのである」。「その

ことに基づいて、すなわち人間イエスを通して起こった証し〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」〕を念頭に置いて、われわれは、それがあの出来事の証しであるところで〔第二の形態の神の言葉である「啓示との<間接的同一性>〔啓示との区別を包括した同一性〕〕において存在しているその最初の直接的な第一の「啓示の<しるし>」としての聖書、またその「聖書への絶対的信頼」に基づいてその聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である「啓示の<しるし>」の<しるし>としての教会の宣教において〕いたるところ、神の証しを見出すのである。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「永遠の言葉の受肉そのものは〔すなわち、その内在的本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の受肉そのものは〕、<特別な>「独一無比な、一回的な出来事である」。したがって、「それは、……さらに<一般的な>受肉へと進んで行く始まりではない」のであって、「啓示が人間イエスの現実存在〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」〕を通して証されているその<証し>は、そこから継続が存在するところの始まりである」。その証左が、「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉であるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示の<しるし>」）としての聖書、またその「聖書への絶対的信頼」に基づいて聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした教会の<客観的な>信仰告白および教義Credo（「啓示の<しるし>」の<しるし>）としての第三の形態の神の言葉である教会の宣教の現存である。言い換えれば、「そこから後方に向かって〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストがメシアであるところのイスラエルの民の現実存在へと、また前方に向かって〔その最初の直接的な第一の、「啓示との<間接的同一性>〔啓示との区別を包括した同一性〕〕において存在している「啓示の<しるし>」としての、「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神と言葉である〕使徒職と、使徒職に基づく〔「聖書への絶対的信頼」に基づいて聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした、「啓示の<しるし>」の<しるし>としての、教会の<客観的な>信仰告白および教義Credoとしての第三の形態の神の言葉である〕教会の現実存在へと通じている聖礼典的な<連続性>が存在するところの始まりである。また、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の神の、「われわれのための

神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での三つの存在の仕方における第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）における「イエス・キリストの〈人間性〉は、そのような第一の聖礼典として〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし〉として〕、同時に被造物そのものの最高の可能性の存在根拠および総内容である」。

まさに、常に先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」ができていところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、神の側からする神の人間との架橋）であり、「神との間の平和」（ローマ五・一）であり、それ故に〈神の認識可能性〉であるところの、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）にしてまことの人間（神の隠蔽）イエス・キリストにおいて、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「ただイエス・キリストの〈名〉だけ」において、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かつての、したがって真の神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕に向かつての人間の用意が存在する」、常に先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」という「人間の局面は、全くただキリスト論的的局面だけである」。言い換えれば、「被造物は、自分自身からでもなく、自分自身によってでもなく、ただ神の配剤と恵みから、神の配剤と恵みによって、神ご自身の宮、しるしとなることができる」。「最初の、起源的な、支配的なくしるし〉としての「〔「真に罪なき、従順なお方」〕〈人間〉イエスが、そのようなものであるということは、さし当って先ず〈人間〉イエスを、そのようなものでないそのほかの被造物の系列から抜き出させている」。バルトは、晩年の著『神の人間性』で、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという〈方式〉（『ローマ書』）の下で、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神が神であるということがいまだに決定的となっていないような人は、今神の人間性について真実な言葉としてさらに何か言われようとも、決してそれを理解しないであろう」と述べながら、「神の神性〔「まことの神」〕において、また神の神性〔「まことの神」、神の顕現〕と共に、

ただちにまた神の人間性〔「まことの人間」、神の隠蔽〕もわれわれに会う」と述べている。また、『教会教義学 神の言葉』では、「最も単純な形において神の啓示の实在を問う問いに対する新約聖書の答えは、ただまことの神〔神の顕現〕にしてまことの人間〔神の隠蔽〕イエス・キリストの〈名〉だけである」、そして「三位一体の根本命題に即して理解すれば、イエス・キリストは、啓示の出来事においてはじめて**神の子、神の言葉**となるのではなく、父を啓示するもの、そしてわれわれを父と和解させるものとして、**神の子、神の言葉**である」——このことは、区別を包括した単一性において、先ず以て、「第二の問題」である「神の本質を問う問い」（「神の本質の問題」）を包括した「第一の問題」である「神の存在を問う問い」（「神の存在の問題」）を要求するイエス・キリストの神の自己啓示からして、第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示および和解におけるキリストの行為の中で認識することができる」、「すなわち、〔「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における〕その啓示と和解が、キリストの神性の根拠ではなくて、〔「自己自身である神」としてのその内在本質である〕キリストの神性が啓示と和解を生じさせる」のであって、「赦す神は、たとえその人がまことの人間であっても人間に内在することは決してないのである」。このような訳で、「そのことはまた、神のそのほかの被造物にとって、約束を意味している」。「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における「人間イエスが、〔「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする三位一体の〕神と一つである単一性へと取り上げられたのであって、いかなるそのほかの被造物についても、そのようなことはなかったのである」。すなわち、「そのことは、繰り返され得ないことである」。

そのような訳で、「神と一つである単一性の中でのこの〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての、〈人間〉イエスとしての〕**被造物の現実存在は、……そのほかの被造物も、被造物的な対象性の中で、まさに全くただこの〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての〕被造物の中でだけ現実であるところのこと**について、**換言すれば神ご自身の対象性について**〔すなわち、「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての対象性について、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」として「ただイエス・キリストの〈名〉だけ」の対象性について〕、**<証し>をすることが許され、その限り**〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての〕**<人間〉イエスと同じように、神の宮、道具、<しるし>であることが許されるという<約束>を意味している**。「この機能は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている〕**創造主と被造物が一つであるあの一回的な出来事**〔先に

述べた<特別な>「独一無比な、一回的な出来事」を〔「聖書への絶対的信頼」に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し〕**確認し・宣べ伝える中で、繰り返されることができる**〔この機能は、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「永遠の言葉そのものが、肉となったということに基づいて、換言すれば神の啓示がイエス・キリストの中で一度ですべてにわたって力を奮う仕方で起こったということに基づいて、われわれは、その同じ神の啓示を、それがその待望と想起の中で証しされているところで、いたるところ認識」し、確認し・宣べ伝える中で、繰り返されることができる。何故ならば、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「永遠の言葉の受肉そのもの」は、すなわちその内在的本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の受肉そのものは、「<特別な>「独一無比な、一回的な出来事である」からである〕」。そのことは、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、「聖書への絶対的信頼」に基づいて、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で宣教する第三の形態の神の言葉である「イエス・キリストの教会、古い契約と新しい契約の教会の中で、事実、繰り返されている機能である」。「福音書の中ではすべてのことが受難の歴史に向かつて進んでおり、しかもまた同様にすべてのことは受難の歴史を超えて甦り・復活の歴史に向かつて進んでいる。すなわち、旧約〔「神の裁きの啓示」・律法〕から新約〔「神の恵みの啓示」・福音〕へのキリストの十字架でもって終わる古い世〔・時間〕は、復活へと向かっている。このキリストの復活は〔すなわち、「実在の成就された時間」、「キリスト復活四〇日の福音」、「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」は〕、新しい世〔・時間〕のはじまりである」（『教会教義学 神の言葉』）。「その意味で、イエスは、黙示録三・一四で、『忠実な、まことの証人』と呼ばれており、またそのようなものとして、『神に造られたものの根源』と呼ばれている」。その内在的本質が肉となったのではなく、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における「<言葉が肉となった>」——「これが、すべてのしるしの<最初の、起源的な、支配的なしるし>である」、換言すれば人間的理性や人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化されたに過ぎない人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」では決してなく、徹頭徹尾神の側の真実としてあるところの、「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における「言葉の受肉としての<「存在者」>」である。「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神であ

る」まことの神（神の顕現）にしてまことの人間（神の隠蔽）「イエス・キリストと地上における可視的なみ国」——「これこそ、神ご自身によって造り出された……神を直観と概念を用いて把握し、したがってまた神について語るができる」「偉大な可能性」である。

バルトは、『ヨブ バルト著（ゴルヴィツァー編・概説）』で、イエス・キリストは、「人間の偽りは煙のごとく、ただちに一切の香りを失う者の証人」、「苦しまれ、十字架につけられ、死して葬られた神の子にして人の子なる、ただひとりの真実の証人 そのものである」と述べている。「その意味」は、「そこで、イエスの中で、〔まことの〕証人としてのその現実存在と職務の中で、〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての〕被造物は、神ご自身の代りに、神について語るあの委託と能力附与の中でのその新しい存在の始まりを持つようになる」、「そして再び、その意味で、イエス・キリストは、コロサイ一・一五で、『見えない神のかたち〕〔「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神〕』と呼ばれ、そのようなものとして、すべての造られたものに先立って生まれた方と呼ばれている」、「第一の観点の下では、ただ単純に、<受肉の実現と結果>であるものが、第二の観点の下では、神の配剤と恵みによって被造物が<拔擢>されることであり、第三の観点の下では、それと共に被造物一般に与えられた<約束>である」、という点にある。「キリストの人間性」は、「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての「被造物であったし、あくまで〔「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての〕被造物であることをやめないのであるから」、「被造物 <一般>は、「最初の、起源的な、支配的なくしるし>」としての〕キリストの人間性のように神と一つになることはできないが」、しかし、「その被造物<一般>の中で、それが、神の配剤と恵みによってそうであることが許される時と所では〔それが、神のその都度の自由な恵みの神的決断により、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて、そうであることが許される時と所では〕、神の証人であることができる」。したがって、その「被造物が、そのようなものであるところ、そこに〔第三の形態の神の言葉に属する〕教会は存在する。換言すれば神によって造られた世界の場所と時間の中での神の自己証言が存在するのである」。何故ならば、その第三の形態の神の言葉に属する「まことのイエス・キリストの教会」は、神のその都度の自由な恵みの神的決断より、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいて、神語り給うが故に神語り給うことを「聞くことによって、常に新しく決定される」からである、教会の宣教における思惟と語りが「キリスト教的語りの正しい内容の認識として祝福され、きよめられたものであるか、それとも怠惰な思弁でしかないかということは、神ご自身の決定事項であって、われわれ人間の決定事項ではない」からである。「何人も神の子供であ

ることなしに聞くことはできないが、同時にまた何人も、聞くことなしに、しかも繰り返し聞くことなしに、神の子供であることはできない」。何故ならば、「神に愛された」、「聞くイスラエル」、「聞くイエス・キリストの教会」、「聞く民」、「聞く神の子供たち」は、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて、おのずから必然的に、絶えずくり返し、その「愛の命令の成就に向かって進んでゆく」からである。「イエス・キリストの中で、神は彼らのために味方してい給う。したがって、イエス・キリストの中で、彼らは、命令を聞くことによって、愛するものとしての彼ら自身の未来を、彼らが〔イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた「神への愛」と、「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」という連関と循環において〕律法を成就する成就を〔純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請を成就する成就を〕、つかむのである」。

バルトはまた、『ヨブ バルト著（ゴルヴィツァー編・概説）』で、次のように述べている——ヨブの神との関係における彼の個の時間性（現存性、自己史）は、始めと終わりについて言えば、神の祝福に満ちている。しかし、その中間の時間性は苦難に満ちている。その現存性にけるヨブの神への対応の在り方は、「自己是認や自己称賛とは何の関わりもない神への無比なる信頼であり」、「自分の身のためだけでなく」、「祭司的に、彼を取り巻く人々のための代理として」「神に対して立っている（29章・31章）」。ヨブは、「敬虔な偽りの証言をした友人三人のために、とりなしの祈りを行う」という仕方で、神に対して（42章）。このように、「真実の証人」であるヨブの個の時間性（現存性、自己史）における信仰の在り方は、「偽りを暴露するのみならず」、「敬虔な偽り者のためにとりなしの祈りをする」という点にある。ヨブのそれは、「誤ることがない神ご自身が、ヨブに力をそえるが故に、その時、ヨブもまたあやまつことはできないし、あやまつことはない」という点にある。また、「神がヨブをわがしもべと呼ばれるのは、ヨブがそう望んだり・そう望むからではなく」、「ヤーウェ自身が先行して喜んでそうするからそうなのである」という点にある。言い換えれば、「神とヨブの関係性」は、先行する「神の側からの自由な選びと意向によって」、そしてその自由な恵みの神的決断に基づいた後続する「ヨブの側からの自由な服従」という点にある——これが、「**真実の証人の〈型〉**」、「**真実の証人の〈基本構造〉**」、「**真実の証人の〈一つの型〉**」である。したがって、「**ヨブの神奉仕**」は、「神から幸いをうけるのだから、災いもうけるべきではないか」、「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。ヤーウェが与え、ヤーウェがとられたのだ。ヤーウェのみ名はほむべきかな」という点にある。したがってまた、ヨブは、「誤りうる人間として、不正をも行いまた不正でもある」ということを背後に持っていることを認識させられ自覚的させられた人間である、それ故にヨブは、

「神奉仕」の「真実の証人の〈型〉」、「真実の証人の〈基本構造〉」、「真実の証人の〈一つの型〉」ではあっても、「真実の証人〈そのもの〉」ではない。したがって、「真実の証人そのもの」である「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」「まことの神」（神の顕現）にして「まこと人間」（神の隠蔽）「イエス・キリスト」ではない。したがってまた、「自由な神の自由な人間として人間的な可謬性を持ちながら試煉の地獄を通りぬけて行くヨブのその危なかしい歩みに対して」、「真実の証人〈そのもの〉」である「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」「まことの神」（神の顕現）にして「まこと人間」（神の隠蔽）イエス・キリストは、その復活に包括された「ゴルゴタの屈辱を通りぬけることによって、すでに勝利者であるという不可謬性の道を歩んでいる」。

「イエス・キリストこそが、神の真実な証人〈そのもの〉である」ということは、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」「まことの神」（神の顕現）にして「まこと人間」（神の隠蔽）イエス・キリスト、イエス・キリストの〈名〉において、「この歴史の中で人間存在の真理〔「まこと人間」存在の真理〕を生きることによって」、復活に包括された「十字架のすがたによって、ほかの一切の実存者は偽りであると暴露したと
いうことを意味している」——「神は、神なき者がその状態から立ち返って生きるために、ただそのためにのみ彼の死を欲し給うのである……しかし誰がこのような答えを聞くであろうか。……承認するであろうか。……誰がこのような答えに屈服するであろうか。われわれのうち誰一人として、そのようなことはしない！ 神の恩寵は、ここですでに、恩寵に対するわれわれの憎悪に出会う。しかるに、この救いの答えをわれわれに代わって答え・人間の自主性と無神性を放棄し・人間は喪われたものであると告白し・己に逆らって神を正しとし、かくして神の恩寵を受け入れるということ、神の永遠の御言葉が（肉となり給うことによって、肉において服従を確証し給うことによって、またこの服従において刑罰を受け、かくて死に給うことによって）引き受けたということ——これが恩寵本来の業である。これこそ、イエス・キリストがその地上における全生涯にわたって、ことにその最後に当たって、我々のためになし給うたことである。彼は全く端的に、信じ給うたのである（ローマ三・二二、ガラテヤ二・一六等の「イエス・キリストの〈の〉信仰」は、明らかに〈主格的属格〉として理解されるべきものである〔それは、「イエス・キリスト〈を〉を信じる信仰」（〈目的格的属格〉）としてではなく、「イエス・キリスト〈が〉信ずる信仰」（〈主格的属格〉）として理解されるべきものである〕）（『福音と律法』）。この「イエス・キリストの〔復活に包括された〕十字架を頂点とした地上の生・生活においては、われわれは、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる啓示認識・啓示信仰に依拠したその信仰の類比を通して、「神に棄てられた者」・「神にたたかれ、苦しめられる者」・「闇に屈伏させられた者」・「敗北」者の姿を認識させられ自覚させられるのである——『福音と律法』においては、次のように述べている——「人間の人間的存在が〔生来的な自然的な〕われわれの人間的存在である限りは、われわれは一切の人間的存在の終極

として、老衰・病院・戦場・墓場・腐敗ないし塵灰以外には、何も眼前に見ないのであるが」、換言すれば「貧民窟、牢獄、養老院、精神病院」、「希望のない一切の墓場の上での個人的な問題……特殊な内的外的窮迫、困難、悲惨」、「現在の世界のすがたの謎と厳しさに悩んでいる（……これらが成立し存続するのは自分のせいでもあり、共同責任がある）」「闇のこの世」「以外には、何も眼前に見ないのであるが」、「しかしそれと同時に、人間的存在がイエス・キリストの人間的存在である限りは、われわれがそれと同様に確実に、否、それよりもはるかに確実に、甦りと永遠の生命以外の何ものも眼前にみないということ——これが神の恩寵である」、「『私がいま肉にあって生きているのは、私を愛し、私のために御自身をささげられた神の御子の信じる信仰によって、生きているのである。（これを言葉通り理解すれば、＜私は決して神の子に対する私の信仰〔目的格的属格的信仰〕に由って生きるのではなく、神の子＜が＞信じ給うこと〔主格的属格的信仰〕に由って〔徹頭徹尾神の側の真実としてのみある**主格的属格**として理解された「イエス・キリスト＜が＞信ずる信仰」によって〕生きるのだということである）』（ガラテヤ二・一九以下）。〔それ故に、〕（中略）自分が聖徒の交わりの中に居る……罪の赦しを受けた（中略）肉の甦りと永久の生命を目指しているということ——そのことを彼は信じてはいる。しかしそのことは、現実ではない。……部分的にも現実ではない。そのことが現実であるのは、ただ、われわれのために人として生まれ・われわれのために死に・われわれのために甦り給う主イエス・キリストが、彼にとってもその主であり、その避け所でありその城であり、その神であるということにおいてのみである』（『福音と律法』）。

「ヨブの悩み」は、「死への恐れではない」、何故ならばヨブは、「自分の死を、神に求めている」からである、「所有、家族、健康、安定、名誉の喪失」に人間の生・生活の無常を感じその無常に苦悩することを主題とするのであればヨブを必要としないから、ヨブは、そうした無常を嘆き死を恐れているのではなくて、「神との関係が断たれた闇への疾走」・「ただ滅び行くだけの生を恐れ・嘆き訴えている」のである。『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』（マルコ 15・34）というこの叫びは、イエスの苦難の総括である。「この叫びの中に、苦難の神のしもべの、真実の証人＜そのもの＞であるイエス」と、「神奉仕」の「真実の証人の＜型＞」、「真実の証人の＜基本構造＞」、「真実の証人の一つの＜型＞であるヨブ」との関連性がある。ヨブは、「苦難の中で、神と関わりあわねばならないことを深く知っている知」と「そのことを深く知っていない非知」との混在の中にあり、その混在における争いにおいて、ヨブは「不正を行う」。しかし、神のその都度の自由な恵みの神的決断により「神の方がヨブから離れないが故に、ヨブは神から離れ得ない」のである。したがって、「ヨブの側からの神への問いや嘆願は、全く無力である」。したがってまた、「最後には、ヨブは、ちり灰の中で悔いる」。そして、ヨブの苦難・嘆きの中心的対象は、先行する神のその都度の

自由な恵みの神的決断による先行的なく選びにあるのであって、後続する人間の自由な選びに基づく契約関係の解消や廃止はないという点にあり、それ故に神は「ヨブに与えていた祝福を、……はぎとり」、「隠蔽するという姿においてヨブと出会う」という点にあり、それ故にまたこのことは、神の側の真実としてある先行する神のその都度の自由な恵みの神的決断による先行的なく選びの中における神とヨブとの関係性の変容という点にある。ヨブは、その神に対して「不真実になるわけにはいかない」が故に、「神の隠蔽性」のただ中で、「苦難のしもべヨブは苦しみながらの服従をする」のである。偽りの外皮の皮相的な「善において神なきこと」は、「ヨブとの対決においてあばかれ仮面をはがれた彼の友人たちの敬虔と神学である」。この「偽りの敬虔と神学」は、「神なきことは、善においても神なきことであって、神なきことであるのをやめない様式の一様式である」、ちょうど第二の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求も、神との「混淆」・「混合」、神との「共働」・「協働」、「神人協力」ということは、「神なきことであって、神なきことであるのをやめない様式の一様式である」ように。「ヨブのドラマ」は、「人間の偽りは煙のごとく、ただちに一切の香りを失う者の証人」、「苦しまれ、十字架につけられ、死して葬られた神の子にして人の子なる、ただひとりの真実の証人<そのもの>であるイエス・キリスト」の「真実の証人の<型>」、「真実の証人の<基本構造>」、「真実の証人の<一つの型>」である者の「ドラマ」である。

さて、「明らかに、被造物にとって<拔擢>を意味するところのことが、神ご自身にとっては……被造物に相対して神が立ちまわっている姿が可視的であることを<断念すること>なのである」。「被造物がその対象性の中で、神ご自身の対象性の代表者となることによって、被造物は神ご自身の対象性を覆い隠す」、ちょうどその内在的本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の「受肉、神が人間となる、僕の姿、自分を空しくすること、受難、卑下は、神性の放棄や神性の減少を意味するのではなく、神的姿の隠蔽、覆い隠しを意味している」ように。「神が被造物を通してご自身をわれわれに対し可視的にし給うことによって、神は、ご自身の中であるところのものとして〔すなわち、自己自身である神として〕、また神がご自身を認識し給うところのものとして〔すなわち、神が自己認識、自己理解、自己規定し給うところのものとして〕、不可視的であり続けることを耐え給う」。「神がわれわれにとって知られるようになることによって、神は、ご自身に対して、われわれにとって知られるようになるために用いられる手段とするしの中で〔われわれにとって知られるようになるために用いられる「神の業の<衣>」、「しるし」、「殻」、「特定ノ外形」の中で〕、疎遠で非本来的なものになり給う」。「神がわれわれをその被造物の言葉を通してご自身へと高め給うこと

によって、神は、ご自身をわれわれのところまで低め給う」——「これらすべてのことは、既に」、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）にしてまことの人間（神の隠蔽）、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの〈名〉」、「イエス・キリストの〈人間性〉にとって妥当する」。バルトは、『教会教義学 神の言葉』で、次のように述べている——「人々は人の子（あるいはわたし）は誰であると言っているか」（マタイ一六・一三）と聞かれ、ペテロ（教会の信仰告白）は『あなたは生ける神の子キリストです』と答えた。『メシヤの名』に対する『人の子』というイエスの自己称号は、覆いをとるのではなく、覆い隠す働きをする要素〔神の隠蔽の要素〕として理解する方がよい。「逆に使徒行伝一〇・三六でケリグマが直ちに、すべての者の主なるイエス・キリストという主張で始められている時、それはメシヤの秘義を解き明かしつつ述べている〔神の顕現の解き明かし〕というように理解した方がよい」。その内在的本質である神性の受肉ではなく、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の「受肉、神が人間となる、僕の姿、自分を空しくすること、受難、卑下は、神性の放棄や神性の減少を意味するのではなく、神的姿の隠蔽、覆い隠し〔神の隠蔽〕を意味している」。「新約聖書的——キリスト論的命題」は、「まことの人間として、神の子あるいは神の言葉が人間、ナザレのイエスである」、「まことの神として、人間ナザレのイエスが神の子あるいは神の言葉である」という点にある。「このイエス・キリストの〈名〉で語るべき最初にして最後のこと、イエス・キリストは誰であるかという問いに対する答え」は、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在本質、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）にしてまことの人間（神の隠蔽）であるという点にある。したがって、「神であ

り給う言葉が人間となったのであって〔すなわち、「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における「言葉が人間となったのであって」〕、決して〔その内在的本質である〕**神性それ自体が人間となったのではない**。すなわち、「ヨハネ一・一四の『言葉は肉となった』という新約聖書の中心的命題、そのヨハネの『言葉』」は、「神的な創造主、和解主、救済主なる言葉、神の永遠のみ子、まことの神〔神の顕現〕にしてまことの人間〔神の隠蔽〕であるイエス・キリストのことである」。「われわれが、……人間イエス〔神の隠蔽〕の中での神の子の顕現〔神の顕現〕の目標と高所は、〔その復活に包括された〕イエスの死と十字架から成り立っているということ、その方はまた甦られた方としても十字架で死なれたこの人間であるということを考えるならば、われわれは、まさにイエス・キリストの人間性〔神の隠蔽〕こそ、最高に神の自己卑下と自己疎外化を、神としてご自分で本来すべての被造物に相対して持ち給うまさった姿が不可視的〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の「本来すべての被造物に相対して持ち給うまさった姿」の不可視化、神の隠蔽〕であり続け、あれほど違った被造物の対象性を通して神の対象性が覆い隠されていること〔すなわち、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての神の不把握性〕を意味していると言わなければならない」。

「神の隠蔽」としての「身をかがめること」、「身を屈すとか身分を落として卑下するという形で遂行される身を向けること」、「より高い者が、より低い者に向かつて身を向けること」は、「ギリシャ語の恵みの意味の中に、またラテン語の恵みの意味の中に、……ドイツ語の恵みの意味の中に含まれている」。この「身を向けることの中に」、「特に（その中でこの言葉が現れている）旧約聖書的な脈絡がそのことを明らかにしているように」、「神がよき業として人間に対してなし給うすべてのこと、神のまこと、神の忠実さ、神の義、神のあわれみ、神の契約（ダニエル九・四）、あるいはあの使徒の挨拶の言葉によれば、神の平和が含まれている」。「それらすべては、**まず第一に、基本的に、神の恵みである**」。神の恵み（「**神的な賜物……の総内容**」——すなわち「啓示者である父に関わる創造、啓示そのものである子に関わる和解、啓示されたものであるものである聖霊に関わる救済」（父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体）は、「確かにきわめて『超自然的な賜物』でもあるが」、それを「与える方自身が、〔自己自身である神〕としての」神ご自身が、〔神の側の真実として〕自分自身を賜物とすることによって、自分自身、〔われわれのための神〕としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方であるイエス・キリストにおいて、神とは全く異なる〕他者との交わりの中に赴

き)、それ故に「自分自身を他者に相対して愛する者として示し給う限り」、「ご自身と……被造物の間に直接交わりを造り出し、保ってゆくことである」から、「そのような賜物なのである」。「**神が恵みを与え給うことの原型は、神の言葉の受肉**〔その内在的本質である神性の受肉ではなくて、その「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方における言葉の受肉〕、神と人間がイエス・キリストにあって一つであることである〔「イエス・キリストにおける神の愛は、神自身の人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一である」（『ローマ書』）〕」。ここで**の常に先行する神の「恵みの秘義と本質」**は、「二つのものが、（徹頭徹尾第一のものの意志と力を通して）直接一つのものとなり、神と人間の間のある直接的な『平和』、パウロが『恵み』という言葉と関連させて、……その内容的な定義として、……しばしば名指すのを常としている『平和』が樹立されるという」点にある。ご自身の中での神（「自己自身である神」）としての「恵み深い神」と、「われわれのための神」としての「恵み深くあり給う」神との間には、「中間的な領域としての恵みについてのグノーシス主義的に受け取られた考え方が介在することは許されない。「ここでは〔神の側の真実として〕すべてのことは直接性に」、それ故に「われわれのための神」としての「神の存在と行為〔外在的本質〕が実際に〔自己自身である神〕としてのその神の〔内在的〕本質的ナ独自ノ性質として、換言すれば神ご自身として、すなわち神ご自身であり、自分自身を確証〔自己認識、自己理解、自己規定〕することによって、〔われわれのための神としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方において〕恵み深くあり給う方として、理解されるということによってもってかかっている」。したがって、「旧約聖書と新約聖書の中で、……力を込めて神を指し示しつつ、『わたしの』、『あなたの』、あるいは『彼の』恵みについて語られているのである」。したがってまた、「聖書的な人間は、ただ単に『あなたの恵みにしたがって、わたしをお救いください』（詩篇一〇九・二六）、『あなたの恵みにしたがって、わたしを覚えてください』（詩篇一〇六・四）、『あなたの恵みにしたがって、わたしを生かしてください』（詩篇一一九・八八）、『あなたの恵みを聞かせてください』（詩篇一四三・八）等々について語られているだけでなく、ほとんどのところで直接、単純に、『わたしに対し恵み深くくあってください』と言われていた」。それに対して、わたしの知る限り、わたしに恵みをく与えてください』という言い方はどこにも出てこない」。このような訳で、「使徒たちがその教会に対して臨んでいるすべてのことは、よく知られている挨拶の言葉でもって総括することができる」——すなわち、「恵みがあなたがたにあるように」。したがって、「**神の言葉は、使徒行伝一四・三、二〇・三二によれば、単純に『恵みの言葉』と呼ぶことができる**。「パウロにおいては、恵み、彼自身の回心、彼の使徒職とその行使、それと共に福音の宣教は、一つのまとまった全体を形作っている」——「神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのである。そして、わたしに賜った神の恵みは無駄

にならず、むしろ、わたしは彼らの中の誰よりも多く働いてきた。しかしそれは、私自身ではなく、わたしと共にあった神の恵みである（Iコリント一五・一〇）。なお、ローマー・五を参照せよ、「まさに恵みこそが、包括的に、神が現にあるところの方として、〔われわれのための神として〕われわれに身を向け給う際の向け方を特徴的に言い表している」。

第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神は、まさにそのようにしてこそ、ご自身の栄光を啓示し給うということ」は、「確かに本当である」。しかし、「人は、神がご自身の栄光をそのように啓示〔神の顕現〕し給うことによって、神はまたご自身の栄光を<隠し給う>〔神の隠蔽〕ということを見逃してはならない」。このことは、「神の啓示を証しするために、その限り、神ご自身を認識する手段として任命され用いられる聖礼典的な実体全体について妥当する」。すなわち、「全線にわたって、覆いをとって<顕わにすること>〔神の顕現〕が起こることによって、また<覆い隠すこと>〔神の隠蔽〕が起こる」。第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている顕現と隠蔽における「啓示は、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>に基づいた〕<信仰>に対して起こるのであるが、不信仰に対しては起こらない」。したがって、「そこでは、それとしての被造物そのものの中に創造主を見てとり、うやまうべきだと考える誤解が可能となる」、「神を礼拝するよにとの呼び出しが、偶像崇拜への誘惑を意味すること」が可能となる。

因みに、カール・バルトは、「神の栄光」について、次のように述べている——「神は、（ドイツ語はここで、ほかの国語が持っていない表現能力を持っているのであるが）ただ単に主であり給うだけでなく、そのような方として栄光に満ちてい給い、他方すべての栄光は主なる神の栄光であるという認識〔「栄光」と「主」との全体性においてイエス・キリストは栄光の主であるという認識〕を遂行しなければならない」。

「われわれは、ここで、まさにこの概念でもってはじめなければならない……」。「Iコリント二・八、ヤコブ二・一によれば、イエス・キリスト」は、「<栄光>〔「聖」、「全能」、「永遠」、「力」、「善」、「あわれみ」、「義」、「遍在」、「知恵」等〕の<主>であり給う」——「そのような方として、認識され承認されている」、すなわち聖書の啓示証言からすれば、「主と栄光とを切り離して認識する切り離しは存在しない」。

第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている顕現と隠蔽における「啓示は、聖礼典的な実在の形式の中で、換言すれば神が、特定の<被造物的>主体——客体関係を、創造主なる神ご自身とその被造物としての人間の間の契約の中で拔擢し給うとい

う仕方で起こる」。それは、その「啓示自身が……啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉を持っていることからして、神のその都度の自由な恵みの神的決断により、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の、起源的な、支配的なくしるし」）であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示との〈間接的同一性〉〔啓示との区別を包括した同一性〕」において存在してその最初の直接的な第一の「啓示のくしるし」）としての第二の形態の神の言葉である聖書——すなわち、「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な完全に自由な聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事、外在的本質）、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）してまことの人間（神の隠蔽）イエス・キリスト自身によって〈直接的に〉〈唯一回的特別に〉召され任命されたその人間性と共に神性を賦与された預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」、換言すれば「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの神性」——すなわち「権威」と、「直接的な、絶対的な、内容的なイエス・キリストのまことの人間性」——すなわち「自由によって賦与され装備された権威と自由を持つ」預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」と、「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基づいてこの聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした教会の〈客観的な〉信仰告白および教義 Credo としての第三の形態の神の言葉である教会の宣教（「啓示のくしるし」のくしるし）の中で抜擢し給うという仕方で起こる。「この聖礼典的な实在の枠の中で神認識は遂行されるのであって、決してそれと違った仕方で、それと違ったところで遂行されるのではない」。「しかし、この聖礼典的な实在〈そのもの〉は、換言すればそのように抜きん出させられた主体——客体関係それ自体は、あくまでも啓示と同一ではないし」、「また現実の神認識と同一ではない〔何故ならば、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性・自己主張・自己義認の欲求もという下で、「神の業およびしるしと直面して、人間の〈盲目さ〉がそのまま続くということがあり得る」からである、顕現と隠蔽における「神の業およびしるしと直面して」、「被造物の対象性の中で、神の対象性を認識するという要求が……拒否され、それと共に、神ご自身が被造物に調子を合わせられ……退け棄てられる」「躓き……が出来事となって起こるということがあり得る」からである〕。「この主体——客体関係は、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕神がご自身を啓示し、

自ら認識され給うことによって、「〔聖書への絶対的信頼〕に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として〕啓示に対して<奉仕する>のである」。客観的な「存在的なく必然性>」と主観的な「認識的なく必然性>」を前提条件とした客観的な「存在的なくラチオ性>」と主観的な「認識的なくラチオ性>」による「まことの神認識の遂行という実在」は、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>からして、「その中で神が〔神のその都度の自由な恵みの神的決断により、客観的な「存在的なく必然性>」と主観的な「認識的なく必然性>」を前提条件として、すなわち「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕ご自身を認識するよう与え、また認識される行為として、そのもとでそのことが起こる必然的なく条件づけ>と区別され、どこまでも区別され続けなければならない。「そして、条件づけは、まことの神認識の遂行の手段であると同時に限界として理解されなければならない。「まさにこの条件づけそのものは、人間に相対して神が開かれていること〔神の顕現〕<と>閉ざされていること〔神の隠蔽、それ故に神の<不>把握性〕を意味している」、それ故に「われわれの神認識の道<と>限界を意味している」。また、それは、「神が閉ざされているということ〔神の隠蔽、それ故に神の<不>把握性〕、われわれの認識の限界も認識され・承認されることを……欲している」。この「神認識の遂行の中で、神の恵みを通して、信仰の中で、……ただ神の恵みを通して、信仰の中でだけ〔すなわち、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいてだけ〕、神が主であり給うことの故に、また神の業とするしの中で、神の業とするしを超えて、覆いがとられ顕わされる〔神の顕現、それ故に神の把握性〕ということは、本質的なことである」。

「そのような訳で、……聖礼典に任命され、そのようなものとして用いられる被造物の対象性に、神の対象性が、本性からして備わっているかのような具合ではない」。何故ならば、それが人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、「神に敵対し神に服従しないわれわれ人間」は、「肉であって、それ故に神ではなく、そのままでは神に接するための器官や能力を持ってはいない」からである、生来的な自然的な「『自分の理性や力〔感性力、悟性力、意志力、想像力、自然を内面の原理とした禅的修行等々〕によっては』全く信じることができない」からである。したがって、「神の対象性は、〔「真に罪なき、従順なお方」、「まことの人間」——この〕人間イエスの中でも、人間イエスがその場にい給うということでもって、そこにあるのでない」、「換言すれば、われわれが、この人間イエスの存在を確かめるならば、それと同時に神の対象性を確かめることができる」といった具合ではない。「われわれが、人間イエスの中で、ルターの有名な言葉によれば、「父なる神のみ心の鏡」と関わらなければならないということは、神ご自身なしには、それ故に信仰なしには本当ではない。「神の対象性」は、その「啓示自身が……啓示に固有な自己

証明能力」の〈総体的構造〉を持っていることからして、客観的な「存在的なく必然性」と主観的な「認識的なく必然性」を前提条件とした（神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた）客観的な「存在的なくラチオ性」——すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）と主観的な「認識的なくラチオ性」の中に存在する。「われわれは、ここでも、鏡に映してみる認識は、Iコリント一三章によれば、常におぼろに見る認識を意味しているということを考えなければならぬ」。「人間イエスもそれとして常にまた謎である」から、「もしも人間イエスがただ単に謎〔神の隠蔽〕でだけあるのではなく、謎〔神の隠蔽〕としてまた、照明、開示、伝達〔神の顕現〕であるとしたら、その時それは、人間イエスが神と一つであるが故であり〔人間イエスが「自己自身である神」としての「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」であるが故であり〕、それ故に、神の子の啓示と神の聖霊を通して生み出されたみ子を信じる信仰の行為の中でのことである〔すなわち、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事の行為の中でのことである〕」。「キリストの十字架は、滅び行く者には愚かである（Iコリント一・一八）。まさにキリストの宣教の愚かさによって、信じる者を救うことが神のみ心になつたのである（Iコリント一・二一）。肉によって知られたキリストのこの愚かさ（IIコリント五・一六）とキリストを通して実現された信じる者たちの救い、それ故にキリストの顔に輝く神の栄光の知識（IIコリント四・六）の間に、客観的に〔その十字架と死を包括し止揚し克服した〕キリストの甦り〔「實在の成就された時間」、「まことの過去」と「まことの未来」を包括した「まことの現在」、客観的な「存在的なく必然性」、客観的な「啓示の出来事」〕が、主観的に聖霊の注ぎ〔「それを通して信者が現にあるところの者、新しく造られた者である聖霊の注ぎ」、客観的な「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による主観的な「信仰の出来事」、主観的な「認識的なく必然性」〕が立っている」。「さて、信者の神を知る認識が、人間イエスの、十字架につけられた神の子（Iコリント二・二）の認識と一致する時、換言すれば彼ら自身愚かな者たちとして選ばれ・召されて（Iコリント一・二六以下）、ギリシャ人には愚かなもの、ユダヤ人には躓きとなるものを通して、神の力と神の知恵を認識するようになる（Iコリント一・二三以下）時、そのことでもって、彼らにとっても、まさに彼らにとってこそ、その啓示〔神の顕現〕の中での神の隠れ〔神の隠蔽〕が〈続いている〉ということが言われている」。神のその都度の自由な恵

みの神的決断によるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいた、その「愚かさから知恵への、肉から霊への方向転換は、彼らがなす業ではなく、彼ら、愚かな者たちに相対して、まさに愚かさを生かし用い給う方の業である」——「あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖と贖いとなられたのである（Iコリント一・三〇）」。

このような訳で、「彼らそのみ子にあつての神の自己認識〔・自己理解・自己規定〕にあずかる参与」は、「人間イエスによって、〔復活に包括された〕十字架につけられた神の子によって仲介されるが故に〔「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、「われわれのための神」としてその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方における第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（神の顕現）にしてまことの人間（神の隠蔽）イエス・キリストによって仲介されるが故に〕、仲介される限り、〈与えられる〉ところの参与である」。この「神認識の秘義の限界」は、「今やまた、……聖書のおよび昔の教会の用いた信仰概念が、神秘主義の方向をとって、あたかも〔主観的な〕信仰の中で、非合理的に人間の〔主観的な〕意識の超経験的な内面において、主体——客体関係が除去されるという形で、人間が神と一つとなるかのように解釈し曲げられることによって否定されてはならない」。神のその都度の自由な恵みの神的決断によるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて与えられる「信仰の中でのわれわれの存在と行為」は、「神との関係として、ヘブル一・一によれば、望んでいる事柄を確信し、〔神の側の真実としてある〕まだ見えていない事実を確認することである。しかし、それは、われわれ自身の行為として、決して『神体験』ではなく〔すなわち、決して「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神としての神の『神体験』ではなく〕、〔それ故に〕それが体験であるとしたら、〔その「われわれのための神」としての「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での三度別様な三つの存在の仕方、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体における〕神の業としの体験であり、それ故に主体——客体関係の限界の中でのまた曖昧性と危険に瀕した姿の中での体験である」。

「また、われわれの信仰も、それとして、「神よって任命され用いられる媒介、鏡、謎〔神の隠蔽〕に属している、啓示の覆い隠し〔神の隠蔽〕と条件づけに属している。〔神のその都度の自由な恵みの神的決断によるイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて与えられる

ところの、] まさにわれわれの信仰認識は、その隠れ〔神の隠蔽、それ故に神の不把握性〕の中での神認識であり、間接的な認識であって、決して直接的な認識ではない」。バルトは、「教会教義学 神の言葉」で、次のように述べている——第三の形態の神の言葉である教会が、第二の形態の神の言葉である聖書を、「聖書への絶対的信頼」に基づいて教会の宣教における「原理」・「規準」・「法廷」・「審判者」・「支配者」・「標準」として、それに「服従し考察の対象とする時」、「はじめて、教会」は、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストをのみ主・頭とする「イエス・キリストの教会について語るができる」、教会<となる>ことによって教会<である>ことができる。言い換えれば、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける「原理」・「規準」・「法廷」・「審判者」・「支配者」・「標準」とすることを通した（それを媒介・反復することを通した）その「間接性こそが、主ご自身を通して設けられ、主の甦えりを通して力を奮うのである」。このような、第二の形態の神の言葉である聖書を媒介・反復するところの、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストと第三の形態の神の言葉である教会（そのすべての成員）との媒介的・反復的な関係性（「間接的な関係性」）のことを、バルトは、「まことの直接性」、「まことの関係性」と述べたのである。したがって、バルトの言うこの「まことの直接性」は、起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストと第三の形態の神の言葉である教会（そのすべての成員）との無媒介的・無反復的な関係性としての「直接性」のことでは決してないのである。したがってまた、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「聖書が、〔第三の形態の神の言葉である〕教会の支配を実行に移すところ」、「そこでは」、「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における起源的な第一の形態の「神の言葉の自由を抑圧するところの自律主義」、第二の形態の神の言葉である「聖書を……除去するところの熱狂主義に対しては、律法的に、禁止しようと欲することができる」のであり、「禁止することを実行しなければならぬ」のである。

「信仰そのものと現実の神認識の間には、客観的に〔その十字架と死を包括し止揚し克服した〕キリストの甦りが〔客観的な、「啓示の出来事」、「存在的なく必然性>」が〕、主観的に聖霊の賜物が〔その「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高举されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による主観的な、「信仰の出来事」、「認識的なく必然性>」が〕、立っている」。言い換えれば、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的な主観に実現された神の恵みの出来事の中で、「人間が『神からして』新しく造られたものとなる、われわれの力の中にはない方向転換が立っている」。したがって、「それとしての

信仰そのものは、「決して彼の主観的な意識の何らかの神秘的な内面においてではなく」、ただ神の業とするしの中で信仰に与えられた約束をつかむのであり」（ちょうど『教会教義学 神の言葉』に引き寄せて言えば、次のようにである——「救済を信仰の中で持つことは、約束として持つことである」、「われわれはわれわれの未来の存在を信じる。われわれは死の谷のさ中であって、永遠の生命を信じる」、「この未来性の中で、われわれは永遠の生命を持ち所有する」、「この信仰の確実性は、希望の確実性である」 「新約聖書によれば、神の恵みの賜物である聖霊を受け、満たされた人は、召されていること、和解されていること、義とされ、聖とされ、救われていることについて語る時、＜すでに＞と＜いまだ＞において終末論的に語る」、「ここで、終末論的とは、われわれの経験と感性にとっての＜いまだ＞であり〔人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍にとっての＜いまだ＞であり〕、〔神の側の真実としてある〕成就と執行、永遠的実在として＜すでに＞ということである」）、**「その限り、あくまでも……その中で人間は、地上では旅人であり寄留者である**（ヘブル一・一三）**盲目の信仰であり続ける**」。